

明日の空へ、日本の翼

北京師範大学学生代表

見学日時：2015年11月24日（火） 14:00－15:00

見学場所：日本航空株式会社（JALスカイミュージアム）

見学概要

1. 企業概況

日本航空株式会社(通称:日航・JAL)は日本を代表する航空会社であり、同時にワンワールドメンバーの一員である。本社は東京の品川区にあり、成田国際空港(国際線)と羽田国際空港(国内線)を拠点とし、世界の51の国と地域に305の就航都市を有している。従来は日本最大規模の航空会社で、2010年1月の会社更生手続の申立以降、その規模こそ縮小したが、2012年に同社が再度上場して以降、同社の純利益額は日本の航空業界で毎年トップを記録している。

日本航空は、日本ひいてはアジア全体でも長い歴史を持ち、また世界トップ500企業の1社であり、かつて「日本株式会社」として戦後の経済発展の象徴と見なされていた。

日本航空の成り立ちは1951年8月に遡る。その後1953年10月に日本で唯一国際定期路線資格を持つ国有航空会社として立ち上げられ、そして1954年には日本初の太平洋横断のアメリカ路線を開設した。その後30年あまりの発展を経て、日本航空は1987年に完全民営化を実現した。そして2002年に日本航空は当時日本で3番目の航空会社であった株式会社日本エアシステムと合併した。

日本航空では現在、ボーイング777-200ER、777-300ER、787、767-300ER等の中・長距離路線用に、そしてボーイング787、767、737を短距離路線用に使用している。また同社グループ内には他に、日本トランスオーシャン航空、日本エアコミューター、琉球エアコミューター、そして北海道エアシステムといった国内路線運営会社があり、幹線輸送や短距離輸送などのサービスを提供している。



2. 展示エリア見学

2.1 発展の歩み

ホールの右側は日本航空の資料館となっていた。壁面には同社のこれまでの歩みが年代毎に紹介されていた。これらの紹介により、私たちは同社の創業期や発展期の歴史を理解し、さらに同社が2005年10月25日にワンワールドへの加盟方針を決定し、2007年4月1日より正式に加盟したといった経緯についても知ることができた。



館内にはまた歴代の客室乗務員の制服や宣伝用ポスター、各種記念品、写真、書籍などが保管されていて、さらに時代の発展とともに変化を遂げた機内食、各年代の時刻表や座席シート、飛行機の模型など多くの歴史的資料が展示されていた。

2.2 実体験

2.2.1 制服体験

展示エリアの最奥には制服体験エリアがあり、スタッフのサポートの下、パイロットやキャビンアテンダントの制服を試着することができる。



2.2.2 マーシャラーの疑似体験

駐機場の映像が映っている画面に自分の身体を向けると、まるで自分がマーシャラーになったような感じがした。パドルを手に持ち、マーシャラーの手振りを真似することでスクリーン内の駐機場に入ってくる飛行機を誘導し、スポットの位置で停止させるのである。



2.2.3 記念スタンプ収集

ミュージアムの各コーナーでは記念スタンプを押すことができる。見学開始時に皆には日本航空のパフレットとともにスタンプパスポートが渡されていたので、皆はこぞってスタンプを押し、記念としていた。

3. 格納庫見学

3.1 航空機部品におけるタイヤの知識とエンジンのファン・ブレードの知識を学ぶ

続いて私たちは日本航空の航空機が使用するエンジンのファン・ブレードとタイヤを見学した。同社のスタッフの紹介に耳を傾けながら、実際に触れることで非常に高価なこの2つの部品を肌で感じる事ができた。

ファン・ブレードは、エンジンの前方にあり大量の空気流動を生み出すもので、これにより巨大な推力を発揮するだけでなく、燃費の向上などにも寄与している。タービンは、流体を羽根車に当て、流体のエネルギーを回転運動に変換して動力を得る原動機であり、航空機エンジンやガスタービンそして蒸気タービンの主要部品の一つである。

航空機用タイヤは、航空機の重量を支えながら離着陸を繰り返すという過酷な条件下で使用されるため、高度な技術が要求される。タイヤの原材料となるゴムはマイナス40℃以下、71℃以上の過酷な条件の下で24時間経過後の性能が規定を満たさなければならない。国内路線の飛行機は飛行距離も短く離着陸が頻繁なため、タイヤの使用寿命は約1カ月半(約200回の離着陸)で、タイヤ表面のゴム部分(トレッド)が摩耗した際は、トレッドの張り替え(リトレッド)を行う。



3.2 格納庫での見学

スタッフの航空機に関する知識の紹介に耳を傾けながら、至近距離で航空機そのものを見ることで、普段飛行機に乗るのとはまた違う体験をすることができた。格納庫ではメンテナンス中の航空機とメンテナンスのスタッフの姿を見かけた。またここではスタッフが余暇を利用して手作りした航空機の模型も見かけ、全体として日本人の繊細さと職業意識の高さを感じた。

そして最後に、ヘルメットを被り滑走路および滑走路での航空機の離着陸の様子を見学した。



知っていますか？

問：日本航空(以下「JAL」)のコーポレートスローガンは？

答：明日の空へ、日本の翼

問：JALのロゴマークは？

答：会社更生の後、JALは2011年4月1日より従来の「鶴丸」のロゴマークをリニューアルし復活させた。今回のロゴでは「JAL」の字体が変わっており、同時に機体側面には同社の英文表記を黒の太文字で表記している。

問：JALは、いつ中国路線を開設したのか？

答：日中国交正常化の2年後の1974年9月29日、JALは日本と中国との定期路線を開設した。現在、JALは東京(成田・羽田)、大阪(関空)、名古屋の3都市から北京、天津、大連、上海、広州へ毎日合計13の直行便を運航している。

問：JALの2015年度の安全目標は？

答：①航空事故ゼロ・重大インシデントゼロ②イレギュラー運航を減らします③お客様をお怪我からお守りします④ヒューマンエラーによる不具合を減らします



感想

中国日本商會が中日友好協會等と共催した第17回「走近日企・感受日本」プロジェクトは、日本を舞台に11月24日から12月1日にかけて行われ、我が校からは6名の学生が参加した。そして、その初日午後に私たちは日本航空を見学し、大いに視野を広げることができた。

今回の訪日に先駆けて、私たちは日本航空の優れたサービスを体験した。出発の当日、私たちの早朝の眠気が客室乗務員の笑顔で吹き飛び、それはまるで、これからの旅が充実したものになることを示しているかのようであった。また離陸前にはシートベルトや荷物棚の入念な安全点検、そして離陸後は、機内を歩き来ながらきばきと食事の提供やその他乗客の様々な要求に対応していた。わずか3時間のフライトだったが、あらゆるところに日本航空の職業意識ときめ細やかさが表れていた。

日本航空のこれまでの発展は一朝一夕のものではなく、その中には繁栄と衰退といった過程があった。しかしその後のたゆまぬ経営努力により、同社は今日の発展を遂げたのである。日本航空には、その真剣な業務態度、新技術への探究、新分野の開拓そして乗客へのきめ細かなサービスといった、成功のための鍵がある。今回の日本航空への訪問は時間こそ短かったものの、私たちはこの著名な航空会社の魅力とその内面を知ることができた。